

わかりやすさの功罪

あそう ゆうこ
麻生 裕子

●連合総合生活開発研究所 主任研究員

日常生活のなかで「わかりやすさ」のありがたみを感じる場面はたくさんある。身近な例として駅をあげよう。乗りたい電車の改札口を探すときは、路線ごとに色分けされたマークが便利である。地上への出口はどこにあるのか迷ったら、黄色い看板に書かれた大きな数字を目印にすればよい。電車の優先席、トイレなどの表示には、ピクトグラムが使用されている。いずれも絵記号、数字、色などを使用し、一目でわかるような工夫が施されている。

しかし、言葉による伝達は一筋縄にはいかない。自分の考えていることを相手がわかるように言葉で伝えることは、とてつもなく難しいとつねに痛感している。労働組合に関係する仕事をしていると、物を書いたり、人前で話したりする機会に恵まれる。そのときによく耳にするのが、「わかりやすかったです」という読者や参加者の声である。

その言葉を聞くと、私はいつも思うことがある。受けとる側にとっては、内容そのものよりも、「わかりやすさ」が重要な評価基準になるのだと。たしかに、まずは内容を正確に理解することは必要だが、理解したと思えばそこで思考を止めてしまっていないのか、もっと深く考えなくていいのかと、どうしても気になってしまう。もっとも、取るに足らない内容だったのかもしれないが、「わかりやすい」で片づけられるならば、むしろ批判をしてくれたほうが私はうれしい。その批判は内容に踏み込んで考えてくれた証拠でもあるし、私自身が気づかなかっ

た点を教えてくれるからである。

さらにいえば、こうした「わかりやすさ」が偏重される傾向に、危うさのようなものを感じる。これは受けとる側だけでなく、伝える側にも問題はあるだろう。例えば、いかに暮らしやすく、公平で安全な社会をつくるかという課題について伝える場面を想定してみると明らかである。そもそも私たちの暮らす社会は、さまざまな制度や人間関係が複雑に絡みあってできている。そうした複雑な問題をわかりやすくするために、無理に簡潔に伝えようとするならば、その行為は無謀である。

もちろん、複雑なことを正確に丁寧に伝えることは必要不可欠である。しかし複雑だからといって、さまざまな事柄を削ぎ落とし、単純化しすぎると問題が生じる。その削ぎ落したもののなかに重要なことが含まれているかもしれないし、内容自体が希薄になる可能性もある。その典型例が実際に台頭しているポピュリズムである。受けとる側である有権者の「わかりやすさ」偏重志向とうまく結合した政治運動といえよう。

誰もが伝える側にも受けとる側にもなりうる。単純さのみを求める「わかりやすさ」には慎重になったほうがよいように思う。情報があふれすぎている時代だからこそ、自分の頭で繰り返し咀嚼してみることが大切であろう。私自身も肝に銘じたい。